

戦争の女性化ーベトナム戦争再考

片山須美子

はじめに

- I バーダムダン運動ー戦争の女性化の始まり
 - II 農業の女性化
 - III ホーチミンルートの建設ー青年運動の女性化
 - IV テト攻勢の失敗と社会の女性化
 - V 戦争終結ー女性化の終焉
- おわりに

はじめに

ベトナム戦争¹当時、多くの女性の姿が、戦争の中で目に見えるものとしてあった。子どもたちを抱きかかえたまま川を泳いで渡る女性や、ナパーム弾を浴びて全裸で走る少女の姿は、ベトナム戦争を世界にもっとも強く印象づけた写真に数えられる²。戦争には避けられない女性の受難の姿とともに、ベトナム戦争では、戦争に参加した女性たちが注目を集めた。その代表は、南ベトナム臨時革命政府外相としてパリ会談に臨んだ、グエン・ティ・ビンであろう。その絵姿は、米国の反戦運動の行進の中で高く掲げられた [Bergman 1975: 161]。南ベトナム解放軍副司令官グエン・ティ・ディンの持つその肩書きは、人々を驚愕させるのに十分であった。撃墜された米機のパイロットに銃をつきつける小柄な女性民兵に象徴されるような、北ベトナム（ベトナム民主共和国）で戦闘と生産に励む、名も知れぬ多くの女性たちの姿もあった。それらは北ベトナムと南部解放民族戦線の宣伝や、米国の反戦運動の中で育ってきた女性解放運動の担い手たちによって、当時の世界に広まった³。

しかし、膨大な蓄積のあるベトナム戦争研究において、女性の参加を論じたものは少ない。民衆と戦場という視点に女性を大幅に取り入れた吉澤南の研究、女性解放やジェンダー問題という視角で、ベトナム戦争やその後のベトナム社会の変化を追い続けている米国のワーナーの研究が、数少ない例である⁴。一方ベト

1 いわゆるベトナム戦争について、ベトナムでは抗米戦争と呼ぶが、本稿では人口に膾炙したベトナム戦争とした。その時期については論者によって異なるが、本稿では米軍が直接介入した1965年から1973年までを中心にして、その前後も含めた時期をさす。

2 銃弾に追われ、急流を渡るベトナム人母子の姿と表情を捕えた、澤田教一の写真「安全への逃避」は、1966年のピューリッザー賞ニュース写真部門を始めとして、数々の賞を受賞した。1972年6月8日米軍の誤爆によりナパーム弾を浴び、燃える服を脱ぎ捨てて、全裸で走る少女を撮ったAP通信の写真は、世界の新聞の第1面を飾ったという。チョン [2001] は少女のその後を追ひ、南ベトナムの一般の農民にとっての戦争と戦後を描く。

3 米国の女性研究者ターナーは、ナパーム弾を浴びて走る少女の写真と、米軍パイロットに銃をつきつける女性民兵の写真とが、自分たちの罪と失敗を表わすものとして記憶に残ったとしている [Turner 1998: 6]。

4 [吉澤 1999; Werner 1981, 1993, 2002]。佐伯 [1996] はベトナム戦争中のバーダムダン運動（後述）を研究対象とし、ベ

ナムの女性、あるいは女性史をテーマとした研究は、それ自体多くはないが、代表的なものとして、ベトナム戦争終結前後に完成した、ベトナムのレ・ティ・ニャム・トゥエットと米国のバーグマンの研究が挙げられる。そこでは女性と戦争との関わりは大きな比重を占めるが、戦争の側から女性の参加を論じたとはいえない⁵。1990年代、冷戦終結後の世界において戦争の性格が変化する中で、従来の戦争を振り返る研究がさかんになった。また湾岸戦争以来の米軍での、大量の女性兵士の出現を契機として、女性の戦争参加というテーマが論じられ、米国の女性研究者の中から、いつの間にか忘れ去られていた、ベトナム戦争の中の戦闘するベトナム女性を掘り起こす研究が出てきている⁶。女性の参加によって、ベトナム戦争の勝敗が決したという論調さえ見られる [Turner 1998: 19]。

本稿ではベトナム戦争への女性の参加に、「女性化」という概念を取り入れ、「戦争の女性化」として論じるところを試みる。「女性化 (feminization)」は、「労働力の女性化」「雇用の女性化」「移民の女性化」「貧困の女性化」など、1960年代から70年代以降の全世界的な社会の変容を表わす有効な概念として登場した⁷。一般に女性化とは、女性の量的拡大が質的な変化を引き起こす流動的な状況をさす。一方「雇用形態の女性化」に見られるように、元来女性に特有なものとされてきたことが男性にも適用され、パラダイムの変換を伴う社会変化が生まれつつあることもさす⁸。またベトナム史研究においては、フエ・タム・ホー・タイが1920年代後半の革命運動において、女性の参加が増加し、女性問題をめぐって議論が沸騰したことを、「革命の女性化」として分析し [Tai 1992: 198-213]、前述のワーナーは、ベトナム戦争時に女性が農業の主な担い手になったことを「農業の女性化」、そしてドイモイ後の農業の状況を「農業の再女性化」と表現している⁹。本稿は、ベトナム史研究における「女性化」概念による分析を継承するとともに、1960年代以降の世界的な女性化の現象をベトナム戦争が共有していたととらえ、女性連合会や労働党の機関紙や運動資料に見る北ベトナムの事例を中心に、女性の戦争への大量の参加や、女性的な方法の広がり、戦争状況に質的な変化を引き起こした過程を論じる。

以下のⅠでは、ベトナム戦争における戦争の女性化の始まりとして、1965年のベトナム戦争の本格化とともに始まった、北部の女性大衆運動であるバーダムダン運動を取り上げる。次にⅡにおいて、バーダムダン運動の大きな部分として、女性たちが農業を全面的に担った「農業の女性化」を論じる。Ⅲでは、若い未婚の女性たちが、青年運動の担い手となって、ホーチミンルートの建設を始めとする軍事に大きな役割を果たしたことを明らかにする。Ⅳでは、テト攻勢失敗後の社会全体の女性化という現象を取り上げ、それによって戦争の退潮局面を乗り越えたのではないかとすることを論じるとともに、南部における女性化についても

トナム女性連合会の運動資料を駆使して論じている。

5 Le[1975]、Bergman[1975]のほか、Le[1975]の内容に沿った英文の概観である Mai, Le[1978]、ベトナム女性連合会の立場で、女性運動史を統一後にまとめた Nguyen[1980-81]、統一後のベトナム女性の地位の低下までを扱った Eisen[1984]がある。

6 Taylor[1999]は南ベトナムの解放戦線の女性兵士について、Turner[1998]は北ベトナムの女性の戦争参加について、いずれも聞き取りによるオーラルヒストリーの叙述を試みている。Pettus[2003]はベトナムの国民統治における女性の扱いの重要性を分析する中で、戦時の女性のイメージが巧みに利用されていることを明らかにする。

7 1986年ハーバード大学で開かれた、先進7か国の女性労働の現状に関する国際会議において、「労働力の女性化」「雇用の女性化」というテーマが取り上げられたのが「女性化」概念による議論の始まりではないかと思われる [竹中 1994: 6]。経済のグローバル化のもたらした、発展途上国における労働力の女性化は、「移民の女性化」などを伴った新たな展開を見せている [伊豫谷 2001]。また世界の絶対的貧困人口の7割を女性が占めるという「貧困の女性化」は、1995年の北京女性会議で重要事項として取り上げられた。

8 フランツ・アルトは、元来女性が育児休業や生理休暇、パートタイムなどで馴れていた柔軟な就労構造を、男女ともに自由にとれる雇用形態にすることが、高い失業率を解消し、家族の再生を促すとしている [アルト 2003: 34,47]。いいかえれば、パートタイム労働を、正規の労働としての権利を確立した短時間労働として、男女に平等に開かれた、労働の選択肢の一つとして位置づけるという主張である [久場 1994: 319]。

9 ワーナーは1993年には女性化という言葉は使わず、戦時の農業経済を「女性経済 (a woman's economy)」といえるほどである [Werner 1993: 92] と表現する。2002年の著作においてドイモイ後の農業の再女性化 (refeminization of agriculture) を論じる際に、1993年の著作では、戦時の農業の女性化を述べたとしている [Werner 2002: 36]。

言及する。最後のVにおいて、戦争が軍事的に終結していくとともに、女性化が収束していった過程を検証する。

1 バーダムダン運動—戦争の女性化の始まり

1965年2月7日、米軍機が17度線北方のヴィンリン地区を空爆して北爆が開始され、3月8日には米軍海兵隊がダナンに上陸して、米軍のベトナムへの直接介入が始まった。3月19日、女性大衆組織であるベトナム女性連合会の中央委員会は、3号決議によりバーダムニエム (ba dam nhien 3つの担任) 運動を発動した。これがその後ベトナム戦争終結まで、北部のほとんどすべての女性を巻きこんだバーダムダン運動の始まりであった。ここでは、運動発動までのベトナム女性連合会の歴史を概観した上で、バーダムニエム運動がバーダムダン運動へと改称されたいきさつを検討し、その後の運動の多様な展開と、労働党と政府がそれに対応して、3つの決議と呼ばれる、女性の登用や昇進をはかった女性政策を出すにいたるまでを論じる。

ベトナム女性連合会は、現在ベトナムにおいて公称1100万人の会員を擁する、世界でも最大の女性組織である。フランス植民地下の1930年に、インドシナ共産党¹⁰の女性大衆組織として発足した女性協会がその前身であり、その後、民主女性会、解放女性会、反帝女性会など、名称と組織を変遷しながら、一貫して女性解放と男女平等を掲げた運動を継続してきたとされている。1941年にベトミン戦線下で、救国女性団として多くの女性組織を糾合したところから、多数の女性を結集する大衆組織としての実体を持ちはじめたようである。その救国女性団を中核として、独立後の1946年10月20日、ベトナム女性連合会が設立された。1950年4月には抗仏戦争のさなかに第1回全国大会が北部で開催され、「前線に行く男性のため後方で生産を行ない、積極的に軍隊を支援し、前線に奉仕する」というスローガンが謳われた。1951年には会員は300万人に達したといわれる [Nguyen 1980: 136]。1954年ジュネーブ協定による南北分断後は、女性連合会はハノイに中央本部を置き、南北の統一を待った。1956年5月に開催された第2回全国大会は、北部での土地改革への女性の支援と、社会的生産への女性の参加を主張している。

しかし統一は実現されず、やがて南部で武装解放闘争が開始され、1961年3月8日南部解放女性連合会がベトナム南部解放戦線の一翼として結成されて、女性連合会は組織的にも運動的にも二分された。北部のベトナム女性連合会は、名称はそのまま、南北女性の一体性を表象しながらも、南部を支援しつつ北部の社会主義建設に女性を参加させるという、北部独自の女性組織としての道を歩み始めた。そのころすでに、北部だけで400万人の会員を擁する一大組織となっていた [Le 1975: 246, 271]。1961年の女性連合会第3回大会では、北部の第一次五か年計画の超過達成と期限前達成に貢献するという任務を掲げるとともに、「1. 団結して生産・節約をよくおこなう。2. 政策をよく実行する。3. 管理によく参加する。4. 政治・文化・技術をよく学習する。5. 家庭を建設し、子どもをよく育てる」という内容の、ナムトット (nam tot 5つをよく) 競争運動を発動した。運動は、政府の政策をよく実行し、社会主義建設と管理を下から支えるものとして、労働党に歓迎されたようである。その最中にアメリカが北部を攻撃し始め、女性連合会は運動の内容を大きく変えざるをえなかった。

バーダムニエム運動の内容は「1. 戦争に行く男性に代わって生産と活動を担任する。2. 家庭を担任し、夫や子どもが安心して戦闘に行くよう激励する。3. 必要なときには戦闘奉仕を担任する」というもので、

¹⁰ 1930年初頭に設立されたベトナム共産党は、同年後半にコミンテルンの意向を受けて、インドシナ共産党に改称した。1945年に形式的な解散をおこなったのち、1951年からはベトナム労働党という名称で公然化し、南北分断後は北ベトナムの政権政党となった。南北統一後の1976年、ベトナム共産党と改称して現在にいたっている。

臨戦体制と、予測される男性の不在という状況において、女性の任務を簡潔に表現していた。3月末に開かれたベトナム労働党中央委員会会議では、戦争が「特殊戦争」から「局地戦争」に転換し、全国が戦争状態に突入したとして、南部を「大前線」、北部を「大後方」とすることを決議したが、バーダムニエム運動の発動は、それに先んじて「大後方の女性化」を明示していた。運動は、青年たちのバーサンサン運動（後述）に刺激されて始まり、趣旨に賛同する女性たちの登録運動として展開され、6月中旬までに、北部全域で200万人が登録するという大規模な女性大衆運動となった [PNVN1965年6月16日]。

運動の高揚を見て、労働党中央書記局は1965年6月8日の第99号指示により、バーダムニエム運動の大衆運動としての評価と、党の指導方針を決定した [Le 2003: 31]。そして同年半ばには、運動はバーダムダン (ba dam dang 3つの担当) 運動に改称された。ダムニエムとダムダンは、それぞれ「担任」と「担当」の漢越語であるが、いずれも日本語とは異なり、引き受けたことをやりぬくという意味がある。特にダムダンには、女性が家事をこなすという意味合いが強い。今日では、その改称をホー・チ・ミンが指示したという言説が定着しているが [Le 2003: 31]、当時の女性連合会機関紙を見る限り、ホー・チ・ミンの名はなく、唐突に名称の変更が行われており、各地の運動報告ではバーダムニエムの名称も使われている [PNVN1965年9月1日]。機関紙の記事では、ダムダンという言葉で、女性が家事に関わりすぎることを批判する、否定的な意味合いで使っている例がいくつかある¹¹。6月の党書記局による承認と、その後の改称は、労働党中央が女性運動へ介入し、指導と被指導の関係の確認を意図したものであり、女性連合会はそれをホー・チ・ミンの女性運動への関心の表れであると、自らを納得させて受け入れたのではないだろう。

しかしバーダムダン運動は、改称の混乱を乗り越えて、多くの女性を結集する運動として発展した。1965年末から66年にかけては、成人女性に対する基礎学習を保証し、特に女性幹部の質を高める教育運動として展開され、バーダムダン学校やバーダムダン学級が、各地に続々と作られた。1966年7月からは、南部の女性ゲリラ兵士グエン・ティ・ウット・ティックをモデルとした小説『銃を取る母』の読書運動が開始された。6人の幼い子どもを抱えた母であり、男性に優るとも劣らぬ銃の使い手であり、時には子どもを放置してまで武装闘争に明け暮れる、1人の生きた女性の姿が、北部の女性たちの心をつかみ、機関紙には投書が次々と寄せられた [PNVN1966年7月16日]。このように、バーダムダンとは、ダムダンの意味や、3つの担当とは何をさすかということはさほど問題ではなく、個々の具体的な目標を持った女性運動として、多くの女性を結集した合言葉のようなものであった。保育所や幼稚園の建設運動、女性の衛生・健康管理など日常生活の改善運動にもなり、後には1968年テト攻勢失敗後の暗い社会を勇気づける大衆運動として、あるいは農業の目標を達成する農業運動として展開される。

バーダムダン運動のめざましい展開を前に、1967年になって労働党と政府は、女性の昇進や女性幹部の増加、そのための制度や設備の充実を、具体的にはからざるをえなくなった。1月10日労働党中央書記局第152号決議「女性動員工作の組織と指導についてのいくつかの問題について」、同第153号決議「女性幹部工作について」、3月8日政府会議第31号決議「国家の各機関・企業の女性労働力を増強する決議」が、3月8日国際女性デー前後に相次いで発表された。第31号決議は「1968年末までに国家の労働者・職員女性の比率を35%以上にする。教育・医療・軽工業・商業部門では50%から70%、あるいはそれ以上の比率をめざす」として、クォータ制を導入した。それらは同年7月から、「3つの決議」と総称され、その学習運動が各地の党支部を中心に展開された。女性の昇進を促し、党組織や地方行政組織、各部門での女性比率を上げることがめざしたが、同時に妻を殴る夫を糾弾し、妻の昇進を喜ばない夫を批判する、「封建制

11 女性班長が仕事が忙しく、家でも家事を1人で負担して、病気になってしまったことを注意する時では、括弧付ではあるが家事のやりすぎを「ダムダン」という言葉で表わしている [PNVN1965年1月]。「そんなやり方のダムダンはやめてください」というタイトルの六八体の詩では、都市に夫を残して疎開した妻が、夫が訪ねてくると、豪華な食事を始めとしてあれこれ世話をして、土産まで用意している [PNVN1966年2月16日]。

度の残滓の一掃」をめざす運動もさかんに行われた [PNVN1967年7月16日; ND1967年7月2日, 16日, 19日]。そこには労働党が農民女性を「農村においてもっとも抑圧された階級」と位置づけ、資本主義化に反対する闘争の象徴にすえようとする動きもあったと思われる。

バーダムダン運動とは、北部が戦争状態に突入する中で、女性連合会が大後方の女性化をみずから引き受けるとともに、女性解放と男女平等を実現する好機ととらえて、女性の地位を上げ、知識や技術を高める運動としたものである。運動に参加した個々の女性たちは、南部の女性ゲリラ兵士の生き方に共感しつつ、自己犠牲的に奮闘したが、それは自己実現のためでもあった。労働党にとって女性解放とは、社会主義の高邁な理想といいながら、「女性の生産力の解放」にほかならず、女性運動の展開を歓迎しながらも、党の指導性を守ろうとした。「3つの決議」は、女性運動の高揚が引き出したものであったが、同時に労働党は、戦時の引き締めのための階級闘争に女性を利用した。戦争の女性化の始まりであるバーダムダン運動と、その制度化の始まりである「3つの決議」は、女性運動の側の主体が堅固に存在したために、労働党との交渉の中で複雑に展開された。そしてバーダムダン運動のもっとも大きな部分は、女性が主要に担うことになった農業生産であった。

II 農業の女性化

ベトナム戦争下の北ベトナムの経済と社会を支え、南部への戦闘員の補給を保証したのは、農業合作社による農業の集団化であり、逆に戦時において農業の集団化が定着したといわれる¹²。しかし完全な集団化が実現したのではなく、耕地面積の5%にあたる自留地でおこなわれた、「家庭経済」と呼ばれる農業生産が、個々の農家を支え、合作社にとっても不可欠なものであった。農業の集団化と、それを補い支える家庭経済の両方において、女性は大きな役割を果たした。ここでは、女性が農業労働力の大部分を占める「農業の女性化」について、女性と集団化との関わり、1965年以降女性が農業の中核的な指導者となったという意味での女性化の進展、それを支えた保育所建設などの具体的な面、および女性連合会が農民組織としての役割を担っていく過程を論じる。

北ベトナムの農業の集団化は、農業労働の集団化、農地の私的所有権を存続させたままでの初級合作社への組織化を経て、農地を合作社の集団所有とする高級合作社化が、1961年の第一次5か年計画開始時から、本格的に開始された。しかし個人経営に対する合作社の優位性は受け入れられにくく、集団化は順調にはすすまなかった¹³。それが1965年の北爆の恒常化以来、急速に集団化が進展し、同年には北ベトナムの全農家の90%が農業合作社（65%が高級合作社、25%が初級合作社）に加入したとされる [白石 1993: 82]。高級合作社においては、合作社所有の農地で、各生産隊が定められた作業時間に、一斉に農作業をおこない、労働点数で評価された。初米の収穫後は、国家へ納める分などを除いた残りが、各世帯に労働点数に従って配分された。しかし「家庭経済」での農業が、農家の主な、ときには唯一の現金収入の源であった¹⁴。戦時中の農家では「95%は5%に及ばない」と言われていたという [Werner 1993: 82]。合作社にとっても、個々の農家の家庭経済による野菜や果物の栽培、豚や鶏の飼育、家畜の糞の肥料としての提供は不可欠なもので

12 古田元夫は、ベトナム戦争が泥沼化し米軍が撤退せざるをえなかったのは、北の人民軍兵士の南の戦場への大量投入のためであり、農業国である北ベトナムで先進工業国並の動員を可能にしたのが、社会主義体制、特に農業合作社であるとする [古田 2002: 192-93]。

13 1962年の労働党中央開催の全国思想会議では、農業集団化を時期尚早とする意見が公然と提起されたという [古田 2002: 194]。

14 家庭経済は正式には「家庭副経済 (kinh te phu gia dinh)」と呼ばれた。1981年の共産党第5回大会で初めて正式に「副」が除かれて「家庭経済」と呼ばれるようになり、「中農」経済として公認された [Werner 1993: 80]。

あった¹⁵。

1960年代初めには、農業合作社の労働力の66%近くが女性であり、女性は農業の集団化の積極的な推進者であった [Nguyen 1981: 60]。「女性が率先し、男性はあとからついてきた」「男性は女性ほど働かず、労働がいやで合作社に入りたがらなかった」との証言や、合作社をやめようとする動きに、女性は応じなかったという例もある [Werner 1993: 83-86]。農具や家畜がなく、戦争で男性労働力も奪われた貧しい農民女性は、集団化に生活の道を見出した。集団化によって重労働が軽減されることを望む女性も多く、家庭経済を支えるためにも合作社は必要であった。個々の農家世帯が合作社に加入するには、16歳以上の全員の署名が必要で、男性の反対で家庭内の争いにもなった。女性連合会はハノイから幹部や宣伝隊を派遣して、集団農業の利点を説明し、女性の生活が楽になり、教育の機会なども増えることを宣伝し、家庭内の争いは地方の幹部が仲裁を手助けした [Werner 1993: 83-85]。女性は合作社において男性とともに主要労働力であり、老人と子どもが補助労働力であった¹⁶。このように、戦争が激化する以前に、農業の女性化がすでに定着していたために、労働党は北部の男性を大量に南部に送ることに踏み切ったのではないだろうか。

ベトナム戦争下での女性と農業の関わりは、農業労働力の7割が女性になったというように、単なる労働力の女性化として語られることが多い¹⁷。しかし戦争の激化は、労働力としてむしろ老人・子どもの補助労働力の動員を促した¹⁸。1965年以降の農業の女性化とは、女性が生産隊隊長や合作社主任として、また農業技術者として、合作社の指導と経営や農業技術の改良を担い、農業幹部の中核となって、保育所や幼稚園の建設、衛生の普及など、生活の社会化を積極的に推進することであった。それには、バーダムダン運動による女性たちの意識の高揚、女性幹部への教育、3つの決議による女性幹部の登用・抜擢の制度化が大きく貢献した。女性連合会は、これまでは女性運動をおこなう政治幹部が中心であったが、技術幹部と専門幹部を増やし、質を高めなければならないと主張した [PNVN1967年3月16日]。女性幹部の養成と登用は、厳しく複雑な思想と組織の闘争であったという地方の報告もある [PNVN1967年10月1日]。

保育所の建設は、1965年以降大幅に増加した¹⁹。保育所は、合作社ができれば、付属施設の一部として自然に作られるというものではなかった²⁰。女性連合会機関紙上で4回にわたって連載された、「よい保育所を建設するにあたってのズクトゥー (Duc-tu) 社の経験の教訓」がそれを物語っている²¹。ハノイ郊外のズクトゥー社では、1965年に麻疹が流行して、400人の女性が仕事を休んだことがきっかけで、保

15 合作社が個々の農家に生産を譲り渡す家庭譲渡制度は、一部で実行されて、増産の効果を上げていたが、資本主義化の道をあゆむものとして批判され、消滅した [古田 2002: 196-197]。しかし合作社の不足分を補うものとしての「家庭経済」は、不可欠のものであり、奨励さえされた。家庭経済は、資本主義的個人主義を復活させるから、廃止せよという主張もあったが、左翼的偏向としてしりぞけられ、家庭副業経済は家族労働であり、集団経済の一部であるとみなされた [三尾 1970: 47]。

16 主要労働力は男性16-55歳、女性16-50歳の労働年齢に達した男女をいい、16歳未満の未成年と56(51)歳以上の老人が、補助労働力とみなされた [三尾 1965: 11; 1970: 55]。また労働には性別分業があり、男性の労働とされた耕起などの方が、はるかに労働点数が高かった [岩井 1999: 531]。年齢による性差と、労働の種類による性差があり、いずれも女性に不利であった。戦時には、出征した男性に代わって、男性の労働を女性がおこなったために、女性が男性と同等の労働点数を稼ぐことができたのである。

17 大雑把な統計では、1965年頃の農業部門への女性の進出を70%、場所によって80%、例外的には90%としている [Vietnamese Studies no. 10(1966): 307]。「多くの合作社では残っている労働力はほとんど婦人」 [三尾 1970: 54] という表現が的確なように思われる。

18 フンイエン省のある果樹園生産隊の労働者60名のうち、20名は老人男性、30名は老人女性、10名は10-15歳の子どもであったという、1967年11月頃と思われる記述がある [三尾 1970: 56]。

19 保育所や、民家を借りて小人数の子どもの世話をする保育グループでは、乳児から3歳までの幼児を預かり、3歳以上6歳までの幼児は幼稚園に預けられた。ベトナムでは現在も保育所と幼稚園の違いは年齢によっている。

20 岩井美佐紀は長期にわたるフィールドワークによって、北部のある村の合作社と、その保育所の変遷を、具体的に詳細に描き出している [岩井 1999]。そこでは1963年に、合作社で初の女性副主任が選出され、その主張によって、同年保育所が初めて設立された。

21 「社」はいくつかの自然村が集まった行政村をさす。合作社の高級化と大規模化にともなって、合作社を社の範囲と一致させることが多くなった。各生産隊は、自然村の単位に従って組織された。保育所は、各生産隊ごとに作られることが多かった。

育所の組織化が始められた。近隣のナムハー省の先進的なトンブイ (Thon Bui) 合作社の保育所を、社の幹部らが2台の車を借りて、各自食料持参で、全社で見学に行った [PNVN1967年4月16日]。北爆下でのこの余裕には驚かされる。見学後学習運動が起こり、戦時に保育所を建設しても無駄だといった意見に打ち勝って、短期間に7つの建物が建てられた [PNVN1967年5月1日]。若い女性たちが、保母の仕事は前途がないと言うので、保母の労働点数を合作社で最高にした [PNVN1967年5月16日]。また子どもたちの栄養や健康のために、専門の執行委員2人を配置した [PNVN1967年6月1日]。男性をも巻きこんだ積極的な取り組みが、理想化されたかたちではあれ、生き生きと描かれている。

女性連合会は、女性の大多数である農民女性のために心を配ったが、それ以上に積極的な役割も果たした。機関紙には毎号、各省や各合作社での女性農民の生産活動、農道や水路の建設運動、競争運動が紹介され、保健や衛生の普及運動も重視された。女性連合会は、各省・各合作社の横の連携をはかる、農民組織としての性格を明確にしていった。1968年には、1ヘクタール当り1人の労働力・粃5トンの収穫・豚2頭の飼育をめざす農業三目標運動が開始されたが、女性連合会は農業三目標の達成を、バーダムダン運動の主要な目標とみなし、テト攻勢の失敗後や、ホー・チ・ミンの死後の立ち直りの過程において、まず第一に、農業三目標の達成を掲げた。1972年の春季攻勢の準備として、1971年2月労働党中央書記局は女性運動工作総括会議をおこない、後方のすべての任務を女性が担当することを確認した [Nguyen 1981: 131]。女性連合会の農業に対する責任が、そこで確立されたのではないかと思われる。同年4月1日から、会の機関紙が一般女性版と農村女性版の2種類に分かれ、農村版には、新しい農業技術や各合作社の近況が詳しく掲載された²²。

ベトナム戦争を支え、戦争下で定着した農業合作社による集団化は、北爆下でのナショナリズムの高揚や、敵に勝つための人々の団結によって、あるいは社会主義的理想によって動かされたというよりはむしろ、農業の女性化によって支えられたものであった。元来農業の大きな部分を女性が担っていたことに加え、1960年代前半から、男性が気乗りのしなかった合作社への加入を、女性は集団化による労働の軽減や、より豊かな生活を求めて推進した。家庭経済も女性が担っていた。すでに定着していた農業の女性化をさらに高度化したのが1965年以降の戦争の状況であった。女性が農業労働力としてのみではなく、農業幹部として合作社経営や技術改良を担い、バーダムダン運動が農業三目標達成を運動の主要な目標とみなし、女性連合会が農業の担当組織となって、女性農民専用の機関紙を発行するにいたって、農業の女性化は、女性の主体性を強化する方向で進展し、北爆の猛威の中で休みなく食糧の増産を保証し続けた。その一方で、農村の若い女性たちの中には、故郷を離れて、南方の激戦地へと向かう者も多かったのである。

III ホーチミンルートの建設—青年運動の女性化

ベトナム戦争において、米軍と北ベトナムの攻防の戦略的な焦点となったのが、北部と南部を結ぶ、いわゆるホーチミンルートであった。米軍は550万トン以上の爆弾を投下し、無数の地雷を敷設し、大量の枯葉剤まで散布して、北部から南部への兵員と物資の補給路を断とうとしたが、ついに成功しなかった。中でも、クアンビン省のラオス国境に位置する、最も重要な地点であった高く険しいムザー (Mu Gia) 峠に、米軍はB52の出撃も含めて激しい爆撃を連続的に加えたが、道路を破壊することはできなかった。米軍の報告書は「……[敵は]自由に通行している。情報によれば何千人ものクーリーがこのルートをいつもきちんと補

²² 女性連合会機関紙 Phu nu Viet Nam は、1954年に創刊されたが、1959年頃から1965年まで農村版が別にあつたのが、バーダムダン運動の高揚の中で、女性の一体化をはかって、1965年5月から一本化されていた。女性連合会が農民組織を兼ねるようになって、再び農村版が発行されるようになったのである。

修している」と嘆いている²³。この「何千人ものクーリー」の大多数が、抗米救国青年突撃隊の隊員として、北部各地の農村から志願してやってきた、20歳前後の若い女性たちであった。ここでは、準軍事的な青年運動を若い女性たちが担い、ホーチミンルートの建設に大きな役割を果たしたことを論じ、ベトナム戦争において、「軍事の女性化」、「軍隊の女性化」という現象があったのかどうかについて検討する。

1959年1月に労働党中央委員会会議は、15号決議によって南部の武力解放を決定し、同年5月19日のホー・チ・ミンの誕生日に、南北を結ぶルートの建設が開始された。抗仏戦争時の連絡ルートと、1954年の南北分断後に形成されたルートをもとにして、第559兵団が建設を担当した。それまで人間やせいぜい自転車が通れるだけだった道を、戦車やトラックが雨季にも通行できる本格的な道路や、ガソリンのパイプラインまでを含んだ一大交通システムへと仕上げる建設事業が本格的に開始されたのは、1965年米軍の直接介入が始まってからである。同年2月、青年のための大衆組織であるベトナム労働青年団の中央委員会は、「すすんで戦闘し、すすんで軍隊に入り、すすんでどこへでも行き、どんな敵にも打ち勝つ」という内容のバーサンサン (ba san sang 3つのすすんで) 運動を発動した²⁴。同年6月には、運動の趣旨に賛成する登録をした青年男女は250万人以上になったという [ND1965年6月21日]。また6月には労働青年団の傘下に、抗米救国青年突撃隊が結成された。その主要な任務が、ホーチミンルートの建設であった。

抗米救国青年突撃隊隊員の過半数は、若い女性であった。バーサンサン運動発動当初は、多くの若い女性が登録して、軍隊への入隊を志願し、武器を取って米軍と闘いたいとの決意を表明している [ND1995年3月7日, 3月21日]。しかし実際は、若い男性が軍隊の主力であり、若い女性たちの熱心な志願と、ホーチミンルート建設の緊急の必要性とが、女性中心の突撃隊を生み出したと思われる。学校や合作社や工場でも、突撃隊は結成され、北爆時の救急活動や、遺体の処理の中心部隊であり、やはり若い女性が担っていた [Turner 1998: 85-87]。ホーチミンルートの建設維持部隊としての突撃隊の、実際の人数やその実態は不明な点が多いが、少なくとも1965年から75年の間に17万人が参加し、その70%から80%が女性であったとされる [Turner 1998: 20-21]。また1965年から68年にかけて、7万人の女性がホーチミンルートで労働しており、任務の70%以上を女性が行っていたともいわれる [Turner 1998: 34-35]。若い女性たちが、爆撃でできた道路の穴を埋めるというイメージが定着しているが [小高 2005: 161]、むしろ岩を切り開く困難な道路建設が主であり、また多数の兵士と車両を通過させるという、激しい重労働を伴う任務も負っていた。

突撃隊に入隊した女性たちの中には、都市の知識人階層もいたが、ほとんどが農村出身であった。入隊を許されるのは17歳以上30歳以下とされていたが [ND1965年7月7日]、年齢を偽って参加した10代前半の少女もいた。突撃隊は正規の軍隊ではなかったが、軍服を支給され、軍隊式に編成された部隊単位で、軍隊の指揮に従って行動した。しかし軍隊のような事前の訓練はなく、故郷での出発時にシャベルと鍬をわたされて初めて、道路建設に行くとわかった者もいた [Turner 1998: 93-94]。ほとんどの女性が志願して入隊したが、その中には、家族と権威から離れた人生を送りたいと願った若い女性もいた。また貧しい家庭では、一人分の食料扶持が減るといった経済的な動機もあった。北爆で死んだ家族や友人の仇を討つためという理由も、かなり普遍的にみられた [Turner 1998: 81-82]。それら様々な理由に、「侵略戦争に打ち勝つため」という大義名分があり、平時ならば家庭を離れることさえむずかしかった、結婚前の20歳前後の女性たちの大量の離村が可能になったのである。

23 1966年の米空軍報告書 (U. S. Air Force briefing notes) [Turner 1998: 93]。

24 発動当初の内容はこのように軍事色が強く、軍隊への入隊志願運動そのものであった [ND1965年2月22日]。バーサンサンの内容はその後次第に軍事以外への広がりや意味するようになり、最終的には「1.すすんで軍隊に入る。2.すすんで生産を促進し学習する。3.すすんで祖国の必要とするためのどこへでも行き、どのような仕事もおこなう」という内容になった [ND1965年7月17日; 白石 1993: 89]。

1966年になって、北爆がハノイ中心に及ぶという危機的な状況の中で、7月16日にホー・チ・ミンは「独立と自由ほど尊いものはない」という有名な抗戦アピールを、ラジオで全北部に流した。その直後から突撃隊への志願者が激増し、200人から300人が割り当てられた地域に、2000人から3000人が応募したという [Turner 1998: 33-34]。ホー・チ・ミンの言葉の「独立と自由」は、国家や民族の独立と自由という意味を超えて、若い女性たちにみずからの独立と自由を希求させ、行動に駆り立てる力があつたのではないだろうか。また若い女性は、労働青年団と女性連合会に同時に参加していることが多く、1965年3月に女性連合会がバーダムニエム運動を発動したとき、すでに行われていたパーサンサン運動とのどちらに参加すべきかといった身の上相談も見られた²⁵。一般に既婚の若い女性は、女性運動に参加しつつ青年運動も行ない、家を離れることのできた、あるいは離れることを望んでいた未婚の若い女性が、ホーチミンルート建設などに参加したようである。

ホーチミンルート建設の現場の実態は、悲惨なものであつた。米機の爆撃によるよりも、事故や病気で死ぬ方が多かつたという。食糧は基本的に軍隊に優先されたため、建設現場では慢性的に不足していた。生理用品もなかつたが、重労働と栄養不足で、ほとんどの女性は生理が止まっていた。1990年にドキュメンタリー映画が上映されるまで、その実態は多くのベトナム人も知らなかつた。重い荷物を運びながら、爆撃を避けて走る若い女性たちの、疲労と病気で暗く黴った顔に、映画を見た人々は泣いたという [Turner 1998: 11]。現場の同僚や軍隊の指揮官の男性たちは、女性たちに深い同情を寄せたが、中央は理解があるとはいえず、彼女らが帰郷しても帰還軍人扱いされず、戦後の補償もないという結果を生んだ。1967年の女性連合会の機関紙には、軍隊にいる義理の息子が親に宛てた手紙という形で、次のような文が残っている。

……ぼくがもっとも嬉しいのは、妹のミンの進歩です。まだ小さくあどけなかつたぼくの妹が、困難に耐えて、こんなに立派に熱心に活動するとは、思いもよりませんでした。ぼくたちは本当の軍隊にいますが、青年突撃隊にいる妹のミンに比べたら、苦勞ではありません。妹は本当に、あつというまに成長しました²⁶。

ここでは青年突撃隊の女性たちの活動を、青年運動の女性化として論じたが、青年運動自体が、軍事的な運動になっていたことから、「軍事の女性化」といってもよいであろう。北爆が中断された1969年から71年の間には、多くの突撃隊の青年たちは帰郷し、軍隊の工兵隊がルートの建設と維持に当たっていた。それは本来、軍隊の任務であつた。それでは、ベトナム戦争において「軍隊の女性化」といえる現象はあつたのだろうか。北部の人民軍の女性は正規軍・地方軍・民兵・専門職を含めて150万人いたといわれる。うち民兵が100万人近くいた²⁷。ターナーはそれを世界一としており、1943年に80万人から100万人の女性兵士がいたとされるソ連が、唯一ベトナムに近いと言う [Turner 1998: 19-21, 23-24]。しかし、「民兵の女性化」ということはいえても、正規軍を頂点とし、末端まで労働党の政治委員の指導を徹底させたヒエラ

25 相談者の若い女性は、婚約者とともに故郷を離れて地方の建設現場で働いていたが、婚約者の青年は自分の老いた両親の面倒を彼女に看させたくて、バーダムニエム運動に登録して、帰って家庭を守るようにという。助言者は青年の身勝手さを見抜き、青年の家庭の世話は村や合作社に任せて、女性に任務を達成するよう諭す [PNVN 1965年5月]。2月に発動されたパーサンサン運動に参加した若い女性たちの中で、すぐに入隊できない女性や夫のいる女性の間から、バーダムニエム運動の原型ともいえる女性運動が発生してきたようである [ND 1965年3月8日, 3月17日]。

26 「誇らしい家庭」 [PNVN 1967年8月16日]。記事自体は養子も含めた8人の子どもたちをわけへだてなく育て上げた夫婦の苦勞話で、年上の3人の息子は軍隊に、1人の娘は青年突撃隊に志願して家を出たということが、夫婦の子育ての成功として称えられている。

27 男性退役軍人でもある戦史家のグエン・クオック・ズンによる。正規軍は6万人、専門職は数千人としている。彼は女性の集団的活動が戦争の勝敗を決したとし、また北部の防空活動のほとんどすべてを女性が担ったとしている [Turner 1998: 19-21]。

ルキー体制である軍隊は、あくまで男性中心であり、「軍隊の女性化」とはいえないであろう²⁸。しかし、その軍事が失敗し、戦争が退潮の局面に入ったとき、軍隊内も含めた社会全体が、女性的なものに救いを求めたのである。

IV テト攻勢の失敗と社会の女性化

1968年のテト（旧正月）の始まる1月31日の未明、解放武装勢力が南ベトナムのすべての大都市と多くの地方都市に大規模な同時攻撃をおこない、米軍司令部と米国民を驚愕させた。しかしこのテト攻勢は、解放勢力に4万人の死者を出し、主力を崩壊させる完全な失敗であった。労働党内部では、当初テト攻勢は失敗したとの評価を下していたらしい[コルコ 2001: 426]。しかしそれ以上に米国は政治的・経済的・社会的に大きな痛手を受け、和平交渉と撤兵への道を選ばざるをえなくなった。労働党にとって予想外の幸運であり、テト攻勢が抗米戦争における一大転換点であり、決定的な大勝利であったという論調をその後保ち続けた。しかし現実には、南部の経験豊かな多くの幹部が失われ、その後の米国による農村掃討作戦は、無数の活動家の殺害や離村を招き、解放民族戦線側の脱走者が相次いだ[コルコ 2001: 429-433]。その後南部での軍事勢力は、北部人民軍の男性が主力となり、南北ともに戦後まで尾を引く大きな社会的変化をもたらした。ここでは、戦争の退潮局面において、北部では女性運動が社会を支え、社会の女性化ともいえる現象があったことを検証し、南部においても外交闘争や政治闘争を女性が担ったことを論じる。

テト攻勢失敗を大勝利といいくるめた労働党の姿勢は、北部においてしだいに重苦しい沈滞を引き起こした。北部の男性が人民軍兵士として南部に送られていく中で、北部の経済と防衛と社会を支えたのは女性運動であった。1968年5月末、女性連合会中央常任委員会は3号決議でバーダムダン運動を再定義し、その内容をより高度で複雑なものにして、男性に代わって女性が全面的に社会を支えることを表明した。生産と活動の担当では、集団の主人となる意識を育て、科学技術を学習し、管理に参加することを挙げ、家庭の担当では、夫や子どもや兄弟が「敵を殺して功を立てる」ように激励するとともに、保育所・幼稚園・共同食堂を積極的に建設するとしている。戦闘の担当においては、直接の戦闘行為への参加や、防空と疎開の任務を明確にした[PNVN 1968年6月16日]。このように、女性が社会の全領域を担当するという意味での女性化がすすむとともに、他方では、日常生活を重視するいわば女性的な運動が、男性を含めた社会の各集団に広げられるという意味での女性化が見られた。

「よい人よい事 (nguoì tot, vïec tot)」運動は1969年初頭から開始され、労働運動、青年運動、子どもの運動、軍隊にまで広がった。まず各組織や大衆団体付属の出版社が小冊子の「よい人よい事シリーズ」を出版し、その読書運動が発動された²⁹。いずれも日常生活の中のささやかな美談を取り上げた内容であり、男女を問わず小さなことから生活を改善し、組織化しようとする動きであった。ハノイの高射砲隊のある兵士は『国のため、人のため』を読んで、米袋を繕ったり、サンダルを作ったり、子どもたちの散髪や洗髪をしてやる

28 ベトナム人民軍の創設者であり、現在も軍隊の象徴的存在である、元国防大臣のヴォー・グエン・ザップは、ベトナムの女性の戦争への貢献として、息子を軍隊に捧げた母たちを強調し、軍隊に直接参加した女性たちの姿を見えなくさせている。息子を戦死させた母親は英雄の母と呼ばれ、多くは農村の貧しい老人女性であるため、その対策がドイモイ後やっと問題にされ始めた。しかし帰ってきて、婚期を逸したり、障害を負ったりして、孤独に暮らす帰還兵士や元青年突撃隊員の女性たちには、光が当たらないままである。また英雄の母 (me anh hung) という表現は、ベトナム戦争時の女性英雄グエン・ティ・ウット・ティックを指す「英雄的な母 (me anh hung)」の意味を無化してしまう。

29 労働総同盟付属の労働出版社は『英雄の民族、先鋒の階級』、人民軍隊出版社は『国のため、人のため』、労働青年団の青年出版社は『英雄の世代』、女性連合会の女性出版社は『勇敢、担当』、その他の市民を対象とした普通出版社は『後方は前線と競争する』、子どもを対象としたキムドン出版社は『小さな仕事、大きな意味』を全部で60万部近く出版した[ND 1969年1月15日]。

兵士の話に感動し、自分の部隊にもそういう兵士が多数いるのに気づいたこと、衛生や掃除、野菜栽培など、今まで軽んじていた小さなことを、今後はしっかり実行しようと決心したという投書を労働党機関紙に寄せている [ND1969年2月1日]。女性はどの部門の冊子でも、四分の一から半数近くを占める。女性出版社の『勇敢・担当』では、当然全員が女性であるが、水利工事や、肥料となるホテイアオイの栽培などに携わる、合作社の女性農民の話が多く、農民全体を代表する組織や出版社がなきにひとしい中で、女性連合会が農民組織的な役割をしていることがここでも窺える [ND1969年1月25日]。

ここで、当時の北部の社会において、男性を「姉さん」や「主婦」と呼ぶ例があったことに触れたい。1968年1月6日の労働党機関紙に載った「やさしい姉さん—英雄的な高射砲兵レ・スアン・ラウ同志の勇敢な戦闘の模範」という記事では、部下の服の繕いをする面倒見のいい副隊長が、「やさしい姉さん」と呼ばれている。また同年6月21日の同紙の、やはり「やさしい姉さん」という記事では、ある中隊の食事担当の責任者である青年兵士の細やかな心遣いが、「やさしい母や姉のよう」と称えられている。男性中心の軍隊の中で、しかもテト攻勢前後の緊迫した情勢の中で、このような表現が見られるのは注目に値する。また1967年3月2日の同紙の、「力を合わせて高原地方を刷新する（商業部門労働英雄レ・ヴァン・フーの話）」という記事では、買い物に慣れていない少数民族ヴァンキエウ人の各家庭を訪問して、必要なものや好みにあったものを代わりに購入し、激しい北爆下でも必需品の供給に努めた商業合作社の男性幹部を、「有能な主婦 (noi tro dam dang)」と称えている。女性的なものに価値をおく、ベトナム社会の基層的な文化といえるものが、北部の戦時社会においても見られ、社会の女性化を促したと思われる。

1969年9月初めのホー・チ・ミンの病死は、ようやく立ち直りかけた社会に、再び打撃を与えた。荘重で儒教的な追悼儀式とその報道は、男性中心のヒエラルキーを強化し、それまで「おじさん」と自称し、他称されていたホー・チ・ミンは、「父」「教師」と呼ばれて、父性化と神格化が強まった。ヴォー・グエン・ザップは人民軍創立25周年記念の演説で、ホー・チ・ミンを「わが人民武装勢力を創設し、教育し、養成した親愛なる父」と明言した [ND1969年12月22日]。一方、少数民族のムオン人が投稿した「ムオン人はホーおじさんを悼む」という詩は、ホー・チ・ミンを「子どもをいつくしむ母」と称えた [ND1969年10月28日]。また青年に対するホー・チ・ミンの教えについて、「母の広大な愛の心、父の周到な教え、教師の遠く広く見つめる聡明さが表れている」という表現もある [ND1969年9月21日]。女性連合会副会長のハー・ティ・クエは、ホー・チ・ミンには「一人の父としての周到な世話もあれば、一人の母としての広大な愛の心もあった」とする [ND1970年5月26日]。ここでは「父」も、権威ある存在というよりは、子どもを世話するやさしい親である。ホー・チ・ミンの女性化は、その父性化に対抗する文化であった。

テト攻勢後の南部でも、女性化と呼べる現象があった。1968年に開始された和平交渉の拡大予備会議出席のため、解放民族戦線代表としてパリの空港に降り立ったグエン・ティ・ビンのアオザイ姿は、全世界の注目を集めた。翌年6月、ベトナム南部共和国臨時革命政府が樹立され、グエン・ティ・ビンは外相兼パリ会談首席代表に任命された。同年8月に始まった労働党のレ・ドゥク・トとキッシンジャー米大統領補佐官との秘密会談が、実質的な和平交渉を進めたとされるが、全世界を飛び回って米国と南ベトナム政権を非難し、人々の支持を訴えた女性外相の姿が国際世論に与えた影響は測り知れない。またテト攻勢を機に南部各都市に成立した民族民主平和勢力連合は、いわゆる第三勢力を形成したが、その代表的人物が、女性知識人のゴ・バ・タインであった³⁰。彼女は解放民族戦線とは一線を画した非暴力の平和運動に固執し、長期間投獄されながらハンスト闘争を続けた。一時は女性たちの合法・半合法活動や獄中闘争が、南部での唯一の政治闘争となった³¹。また政府軍への男性の徴用と、米国式の農業近代化とが進む中で、女性が全雇

30 ゴ・バ・タインと女性運動については小菅 [1997]、To so phu nu Nam bo [1989: 442-445] を参照。グエン・ティ・ビンと外交闘争については Le [1992:98-100] 参照。

31 1961年労働党は南ベトナムの山岳部においては武装闘争を主とし、都市部においては政治闘争を主とし、平野農村部に

用農業労働者の四分之三を占めるという農業労働の女性化が、南部でも見られた [コルコ 2001: 626]。

米国ニクソン政権による「戦争のベトナム化」が成功していないことを見抜いた労働党は、守勢から攻勢に転じ、1972年春季大攻勢に踏み切った。ニクソン政権は北爆を再開し、特に1972年末のいわゆるクリスマス爆撃はすさまじいものであったが、米国内と世界の非難を浴び、和平交渉を早める結果となった。1973年1月27日、臨時革命政府代表グエン・ティ・ビンらが署名してパリ協定が発効し、3月末には米軍の最後の部隊が撤退して、ベトナム戦争は最後の局面を迎えた。1968年初めのテト攻勢の失敗から1972年の巻き返しに至るまでの困難な時期において、形態はまったく異なるとはいえ、南北ともに女性化と呼べる現象が社会を支え、運動を支えていた。その深い社会的変化を考慮せず、またパリ協定に表わされていた、南北統一への多様な可能性をも無視した、その後の労働党の軍事中心の行動は、戦争の女性化の側面を大きく変えるものとなった。

V 戦争の終結—女性化の終焉

パリ協定調印後、労働党は100万以上の兵力と近代的装備をもつ南ベトナム政府軍の優位性に対し、当初は慎重な姿勢をみせたが、南ベトナム政府による農村平定や、農地改革の一定の成果に危機感を抱き、米軍の再介入の可能性がないことを確信した1974年9月、南部解放作戦に踏み切ることを決意した。1975年1月の労働党政治局会議では、その年のうちに戦略的打撃を与えることと、翌年の総攻撃と一斉蜂起を決定した。その後の展開は、人民軍の攻撃を受けた政府軍の、雪崩のような瓦解によって、労働党の計画を超えて急速に進み、4月30日、圧倒的な北部人民軍の武力によってサイゴンが制圧され、5月1日までに南部全土解放がなされた。1976年には北ベトナムの主導する南北統一が実現し、南部の男女革命家や活動家たちが考えていたような漸進的な統一は葬り去られた。思いがけない早すぎた勝利は、北部の労働党の男性指導部に錯覚と驕りを生み出した。そして勝利の成果から排除されたのが、それまで重要な役割を果たしていた南部であり、また南北の女性たちであった。ここでは、パリ協定調印後の北部の女性運動の変容、バーダムダン運動や農業の女性化の終焉、南部の武力解放の問題点を論じる。

北部の女性運動は、パリ協定調印後大きく変わった。1973年10月、労働党中央委員会会議は南部の武力解放の確認とともに、74年から75年にかけての北部の経済復興発展2か年計画を採択し、社会主義的工業化を急速に進めようとした。1974年3月4日から7日にかけて開かれた、第4回全国女性大会の決議に挙げられた第一の任務は、「社会主義的女性を創造し、祖国と社会と家庭に対する義務をよく果たす」、第二の任務は「競って労働と生産をおこない、勤勉に節約して社会主義を建設する」運動に参加するであった。女性連合会は労働党の路線に従って、社会主義建設と家庭への責任を重視する「社会主義的女性」を掲げたのである [Hoi lien hiep phu nu Viet Nam 1974: 10-23]。決議の前文には、バーダムダン運動を新しい内容で続けるとあり、バーダムダンは「国のことを上手におこない、家のことを引き受け、男女平等を実現するよう奮闘する」というスローガンに変わった。生産・家庭・戦闘の3つの担当から戦闘が消え、1976年以降の全土社会主義化の下では、男女平等のために女性の政治参加を促すという内容になった。しかし困難な経済状況で、女性の政治参加は後退し、バーダムダン運動はいつしか立ち消えになって、「総括のない運動」と言われるようになった³²。

おいては双方を並行して推進するという戦略を立てたが、農村において政治闘争を担ったのは、長髪軍 (doi quan toc dai) と呼ばれた女性部隊であり、武器を持たずに大挙して政府軍や行政に対峙した。1960年代前半から南ベトナムでは政治闘争の女性化が確立していた。

32 女性の政治参加を如実に表わす国会議員の女性比率をみると、第1回国会 (1946) では2.5%、北部のみで開かれた第2

1973年以降、大量の男性兵士たちが北部の農村に帰郷し、それまで女性たちが占めていた合作社の主任などの指導的地位に、当然のように復帰した。さらに性別・年齢に関わらず、同量の籼米を支給する制度に不満を持ち、健康な成年男性とその家族がもっとも利益を得るように、制度の手直しをはかった例も見られた[岩井1999: 530]。しかし女性たちの不満はもっと大きかったはずである。全国女性大会で労働党の路線に従った女性連合会の機関紙には、料理や服装、刺繍の仕方など、平和を享受するかのような、穏やかな「女性的な」記事が目につくが、なおも闘い続ける南部の女性たちの記事が、紙面から消えることはなかった。そして、女性を対象にした学習運動が弱まっていること、合作社に女性の管理委員がいなくなったことへの危機感が述べられている[PNVN1974年9月17日, 11月26日]。一方1974年末から、南部へ向かう人民軍の大部隊を通すために、5万人の若い女性が青年突撃隊として再び動員され、道路を切り開いた[Nguyen 1981: 209]。多くの女性たちが一線を退く中で、準軍事運動としての青年運動は、最後まで女性化に頼っていた。

パリ協定調印後も、協定の実施を求め、政府軍による違反を摘発し、グエン・ヴァン・ティエウ大統領の辞任を求める南部の女性たちの闘争は続いていた。中でもゴ・バ・タインの作った「生きる権利を求めるベトナム女性運動」は都市の女性運動の中心であった。1975年の春の攻勢に先立って、解放女性連合会の幹部たちは、ひそかにサイゴンに入って武器や食料や救急施設の準備をした。また全南部で20万人以上の女性たちが、戦闘の準備や手助けをしたという[To so phu nu Viet Nam 1989: 495-497]。南部解放武装勢力の特別攻撃隊の男性兵士が「北の正規軍でなければサイゴン突入は不可能だった。しかしわれわれ南部のものたちはあらゆる勢力を動員した」[小倉2005: 284]と語るように、戦争の最終局面において南部の解放勢力のおかれた、重要であるが劣位とされる位置の大きな部分を、南部の女性が担っていたのである。そしてその劣位の位置は、北部の新しい状況における女性運動の前途を模索していた北部の女性幹部たちや、大部隊を南部に送るために黙々と道路を建設し補修していた、北部の若い女性たちも共有したのではないだろうか。

また1975年の春の人民軍の圧倒的な勝利を導いた、政府軍の瓦解の大きな要因に、政府軍兵士の家族の存在があった。米国の援助によって、あり余る近代的な装備に守られながら、政府軍兵士は、その給料の低さのために家族を養うことができず、兵士の半数近くは家族を、部隊内やその周辺に住まわせていた。そして妻や娘の稼ぎで生計を立てなければならぬ、増大しつづける貧民の群れと化していた[コルコ2001: 350,356]。人民軍の突然の攻撃を受けた政府軍の兵士は、家族を守るために自分の持ち場を放棄した。そして家財道具を運びながらの逃避行は混乱を極め、略奪や強姦、兵士どうしの撃ち合いの中で政府軍は悲惨な最期を迎えた[コルコ2001: 675]。家族を伴う軍隊という、政府軍の前近代的な性格は、北ベトナムとは異なる意味で、女性の軍事への参加の一形態であった。それが北部人民軍の、予期せぬ勝利を導いた。しかしそれは、南ベトナムの社会が荒廃し、地元に着いた解放戦線幹部にさえ把握できない、大きな流動状況のもとにあったことをも意味していた。それは急速な統一や社会主義化によって解決できるものではなかった。

かつて輝かしい全土解放、民族の統一の成就と称えられた事柄に内在する問題点は、南部解放後30年を経た今日、海外の研究者がようやく公然と研究対象にするようになった[中野2005]。消滅してしまった解放民族戦線や民族民主平和連合、第三勢力の見直しがされており、本国でも資料の保存や研究などが徐々に考えられているようである。ベトナム戦争の終わり方を考察するとき、南部も含めた戦争の女性化とその終焉という視点が必要ではないだろうか。女性化に頼って戦争を進め、社会を維持しながら、北部の男性指導

回(1960)から第5回(1975)までは、それぞれ11.6%, 18.2%, 29.7%, 32.3%と急増した。全国での第6回国会(1976)からは26.8%, 21.7%と減少していき、第8回国会(1987)では17.7%まで落ち込んだ。その後次第に回復し、2002年の第11回国会では27.3%までになった。

部中心の強引な統一と、その後の社会主義化をはかった政府は、困難な経済建設にふたたび女性の力を必要とした。しかし、戦時のような女性の動員はもはや不可能であった。戦時に苦勞して獲得した地位も機会も失った北部の女性や、自主性と地道な努力を否定された南部の男性と女性を無視した統一と社会主義化は、成功する基盤を失っていたといえよう。

おわりに

北ベトナムが戦争状態に突入する中で、ベトナム女性連合会は後方の女性化を引き受け、同時に女性解放と男女平等を実現する好機ととらえて、バーダムダン運動が多様に展開された。中でも、女性が農業労働力の大部分を占めただけでなく、農業指導者の中核の役割を果たした農業の女性化は、戦時化の農業生産と農村社会を支えた。一方、農村の若い女性たちを中心とした、青年運動の女性化は、ホーチミンルートの建設と維持を担い、軍事の女性化の中心となった。テト攻勢失敗後の戦争退潮局面は、社会全体の女性化によって乗り越え、南部においても、外交闘争や政治闘争の女性化が見られた。それらがなければ、ベトナム戦争における北ベトナム側の勝利はなかったであろう。しかし、戦争が軍事的に終結するとともに、女性化は終焉した。

女性化そのものは、従来のジェンダー役割が揺らぐ、流動的な状況を表わすにすぎず、それが女性にとってどういう意味をもつかは、女性たちの主体や社会との関係などによる。ベトナム戦争下の北ベトナムの女性たちは、戦争が女性解放と男女平等を実現する希少な機会であるととらえて、積極的に関わった。それが可能であったのは、一方では、以前から強力な女性運動が存在し、儒教社会といわれながらも、女性や女性的な価値を尊重する面があったベトナムの社会によってであり、他方では、先進国において女性の社会進出による労働力の女性化が進み、発展途上国においても開発体制の中で女性の状況が大きく変化した、1960年代後半以降という時代によるものであった。しかし女性化には、先進国における主婦のパートタイム労働者化や、発展途上国の女性の移民化などの、新しい女性役割を固定化する働きもある。北ベトナムの女性運動は、男性が不在であったとはいえ、家庭を女性の主体的な活動の場ととらえ、女性の家庭からの自立を問題としなかったために、戦争の終結とともに、男性への譲歩と女性の家庭役割を甘受しなければならず、女性化の終焉と、戦後の女性運動の後退を招いたのである。しかし、戦争の女性化のもとで、主体的な運動を繰り広げた実績と記憶を持ったベトナムの女性運動は、ドイモイ後に復活し、農業の再女性化、起業の女性化などの新しい状況の中で、積極的に活動している。

ベトナム戦争は、東西冷戦期に起こった戦争であった。本稿で論じた戦争の女性化は、第二次大戦のいわゆる総力戦における女性の戦争参加、あるいは冷戦後の現代の地域・民族紛争下における女性の戦争参加と、どのような共通点や差異があるのかを考察する必要がある。女性連合会は、女性の戦争協力を促し、男性の出征を激励することを女性の任務とした。それは、そうした女性の補助的役割に反発し、みずから兵士として戦争に参加することを望む若い女性たちをも生み出した。また一方では、女性連合会は1946年の発足当時から、会のマークとして、青い地球とオリーブの枝をくわえた白い鳩の図案を採用しており、ベトナム戦争中には世界の女性たちに、反戦平和を訴えた。女性連合会の持っていたこのアンビヴァレンスをも踏まえて、ベトナム戦争における戦争の女性化を、より広い歴史的コンテクストの中で解明することを、今後の課題としたい。

略記

ND: *Nhan dan* (ベトナム労働党(共産党)中央機関紙『ニャンザン』)

PNVN: *Phu nu Viet Nam* (ベトナム女性連合会中央機関紙『ベトナム女性』)

参考文献

Bergman, Arlene Eisen 1975. *Women of Viet Nam*. Rev. ed. San Francisco: Peoples Press.

Eisen, Arlene 1984. *Women and Revolution in Viet Nam*. London: Zed Books.

Hoi lien hiep phu nu Viet Nam 1974. *Nghi quyet dai hoi phu nu Viet Nam lan thu tu*. Ha Noi: Nha xuất bản Phu nu.

Le Chan Phuong (bien soan va suu tam) 2003. *Phong trao phu nu "3 dam dang" trong cuoc khang chien chong My, cuu nuoc*. Ha Noi: Nha xuất bản Lao dong - Xa hoi.

Le Thi Nham Tuyet 1975. *Phu nu Viet Nam qua cac thoi dai*. Ha Noi: Nha xuất bản Khoa hoc xa hoi. In lan thu hai.

Le Tuyet Thanh 1992. *Phu nu mien Nam*. Ho Chi Minh: Bao tang phu nu Nam bo.

Mai Thi Tu, Le Thi Nham Tuyet 1978. *Women in Viet Nam*. Ha Noi: Foreign Languages Publishing House.

Nguyen Thi Thap (chu bien) 1980-81. *Lich su phong trao phu nu Viet Nam*. 2 tap. Nha xuất bản Phu nu.

Pettus, Ashley 2003. *Between Sacrifice and Desire: National Identity and the Governing of Femininity in Vietnam*. New York and London: Routledge.

Tai, Hue-Tam Ho 1992. *Radicalism and the Origins of the Vietnamese Revolution*. Cambridge: Harvard University Press.

Taylor, Sandra C. 1999. *Vietnamese Women at War: Fighting for Ho Chi Minh and the Revolution*. Kansas: University Press of Kansas.

To so phu nu Nam bo (chu bien) 1989. *Truyen thong cach mang cua phu nu Nam bo thanh dong*. Ho Chi Minh: Nha truyen thong phu nu.

Turner, Karen Gottschang with Phan Thanh Hoa 1998. *Even the Women Must Fight: Memories of War from North Vietnam*. New York: John Wiley & Sons.

Werner, Jayne 1981. Women, Socialism, and the Economy of Wartime North Vietnam, 1960-1975. *Studies in Comparative Communism*, vol. xiv: 165-190.

—1993. Cooperativization, the Family Economy, and the New Family in Wartime Vietnam, 1965-1975. In Jayne Werner & David Hunt (eds.) *The American War in Vietnam*. Ithaca, N.Y.: Cornell University: 77-92.

—2002. Gender, Household, and State: Renovation (Doi Moi) as Social Process in Viet Nam. In Jayne Werner and Daniele Belanger (eds.) *Gender, Household, State: Doi Moi in Viet Nam*. Ithaca, N.Y.: Cornell University: 29-47.

アルト, フランツ (村上敦訳) 2003. 『エコロジーだけが経済を救う』 洋泉社.

伊豫谷登士翁編 2001. 『経済のグローバリゼーションとジェンダー』 明石書店.

岩井美佐紀 1999. 「ベトナム北部農村における社会変容と女性労働—バックニン省チャンリエット村の事例から—」 『東南アジア研究』 第36巻4号: 525-545.

小倉貞男 2005. 『ドキュメントヴェトナム戦争全史』 岩波現代文庫.

小高泰 2005. 「ベトナム人民軍の素顔」 中野亜里編 『ベトナム戦争の「戦後」』 めこん: 143-180.

- 久場嬉子 1994.「新しい生産と再生産システムの形成へ向けてー 21世紀へのパラダイムー」竹中恵美子・久場嬉子編『労働力の女性化 21世紀へのパラダイム』有斐閣:291-321.
- 小菅幸一 1997.「ゴ・バ・タイン ドイモイ時代にも生きる第三勢力の精神」山崎朋子編『アジアの女性指導者たち』筑摩書房:259-295.
- コルコ, ガブリエル (藤田和子・藤本博・古田元夫訳) 2001.『ベトナム戦争全史 歴史的戦争の解剖』社会思想社.
- 佐伯理子 1996.「ベトナム戦争期における戦時動員体制と女性ーバーダムダン運動研究」1996年度東京外国語大学地域文化研究科修士論文.
- 白石昌也 1993.『ベトナム 革命と建設のはざま』東京大学出版会.
- 竹中恵美子 1994.「変貌する経済と労働力の女性化ーその日本の特質ー」竹中恵美子・久場嬉子編『労働力の女性化 21世紀へのパラダイム』有斐閣:1-30.
- チョン, デニス (押田由起訳) 2001.『ベトナムの少女 世界で最も有名な戦争写真が導いた運命』文春文庫.
- 中野亜里 2005.「ベトナムの革命戦争」中野亜里編『ベトナム戦争の「戦後」』めこん:29-58.
- 古田元夫 2002.「インドシナ戦争ー救国戦争と「貧しさを分かちあう社会主義」」末廣昭編『岩波講座東南アジア史9』岩波書店:181-204.
- 三尾忠志 1965.「北ベトナムの経済事情」『季報国際情報』第15号:1-26.
- 1970.『新たな重要段階に入った北ベトナムの農業合作社運動』国際情勢研究会.
- 吉澤南 1999.『ベトナム戦争ー民衆にとっての戦場ー』吉川弘文館.